

Peregrinatio Aetheriae の従属節

矢 島 猷 三

Peregrinatio Aetheriae『アエテリアの巡礼記』については、作者も成立年代も詳しいことは判っていない。ただ大よそのところ、スペイン西北部あるいはフランス南部出身の尼僧院長によって、四世紀の末から五世紀の初めにかけて書かれたものであろうと推定されている。この時代はラテン語史の中で、V. Väinänen のいわゆる latin tardif (bas-latin) 「後期ラテン語」の時代に相当するものであり、^(注1)ここでは白銀時代の「後期古典ラテン語」とシャルルマーニュによるカロリング・ルネサンス以降の「中世ラテン語」の間であって、古典ラテン語は言語的・文法的に次第に衰退してゆき、ロマンス諸語へむかって急速に変化を遂げてゆく話しことばの「俗ラテン語」の姿が、文章語の中に次第に色濃く投影されるようになってくる。この時代を特色づけている数多の宗教的作品群の中でも、シナイ山への聖地巡礼の経過とイエルサレムでの儀式の詳細を描いたこの Peregrinatio は「俗ラテン語」の文献の古典とも称すべく、すでに多くの精密な文献学的研究が著わされている。

このテキストの言語的特徴を端的に示す一つの例として今 missa という単語をとりあげてみると、この語は我々のテキストでは二つの意味で用いられている：

legitur iam ille locus de euangelio cata Iohannem..., quo lecto iam fit oratio et missa (37, 7) 「ヨハネによる福音書の一節が読まれ、それが読まれると祈りがなされて解散となる」

fit ergo prima die missa in ecclesia maiore quae est in Golgotha (25, 10)
「第一日目はゴルゴタの丘にある大教会でミサが行われる」

近代語「ミサ」の語源は Ite, missa est 「〔集まりは〕解散された、汝ら立ち去るがよい」の過去分詞女性形 missa とされるが、第一の例は名詞として用いられた missa が語源に近く「解散」の意味で使われたものであり、第二の例はこの単語が métonymie によって儀式の全体を示すにいたったものである。

以上の例は一つの単語に複数の意味が共存し、それによって新・旧の意味の変化の跡を辿ることができるごく簡単な場合であるが、ちょうどこれと同じように、Peregrinatio を読んで気がつくことは、ある一つの語が幾つかの文法的機能を併せ持ち、また逆に一つの文法機能が幾つかの語や表現手段によって表わされているという事実である。これは古典ラテン語の時代にも決して珍らしいことではないが、我々のテキストでは古いものと新しいもの、ラテン語的なものとロマンス語的なものが混在しているために、テキストの正確な解釈と理解が、時として微妙な難しさを呈することになる。以下二、三の点に焦点をあて、研究ノートの的に実例に即してこれらを整理してみたいと思う。

上記の特徴を明確な形で示しているものの一つは従属節を導く接続詞であろう。そのうちまず時間節をとり上げてみると、古典と共通の ubi, ut, cum の三つの接続詞のほかに、古典では特に疑問詞として用いられていた quando が時間節を導くのに頻繁に用いられている：

Septima autem septimana cum uenerit, id est quando iam duae superant cum ipsa

ut pascha sit... (29, 2) 「第七週目がやってくると、つまりその週を入れて復活祭までにもう二週間しかなくなると」(ほかに 1, 2; 4, 8; 5, 2; 8, 5; 9, 6; 10, 3; 20, 10; 39, 5; 46, 3; 46, 4; 48, 1; 48, 2)

次に本来は理由節を導く接続詞であった *quod* が時間節にも用いられている:

Mons autem ipse per giro quidem unus esse uidetur, intus autem quod ingrederis plures sunt (2, 5) 「その山は周囲から眺めると確かに一つのものに見えるが、中へ入ってみると幾つかに分かれている」(ほかに 2, 2; 28, 2)

さらにまた場所を示す関係副詞の *qua* が時間節に転用されている:

Consuetudo enim hic talis est ut omnes qui sunt... aputactitae... non solum diebus quadragesimarum sed et toto anno, qua manducant, semel in die manducant (28, 3) 「修道僧たちは全て、四句節の間だけではなく一年中をとおして、食事するのは日に一回だけだというのがここでの慣習である」(ほかに 5, 7; 7, 1; 16, 3; 39, 5; 45, 2)

ほかに「のように」の意味の比較節を導く筈の民衆語的な *quemadmodum* によっても時間節は示されている:

Vigiliae autem paschales sic fiunt quemadmodum ad nos, hoc solum hic amplius fit quod infantes cum baptidiati fuerint et uestiti, quemadmodum exierint de fonte, simul cum episcopo primum ad Anastase ducuntur (38, 1) 「復活祭前夜の祈禱は我々の国と同じように行われる。ただここではさらに、新しく洗礼を受けた人々が洗礼を終え白衣をまとめて泉から出てくると、司教と共にまずアナスタシス教会へ導かれる」(ほかに 5, 1; 5, 3; 5, 4; 12, 4; 17, 3; 24, 9; 27, 7; 27, 9; 28, 1; 43, 2; 43, 5; 47, 1) この文章ではたまたま相関詞 *sic* を伴って比較節を導くものと、*cum* と並んでほぼ同じ意味の時間節を導くものが混在している。

比較節を導く *quemadmodum* (上記のほかに 5, 5; 5, 5; 8, 1; 8, 4; 12, 6; 39, 1; 45, 1) は我々のテキストでは古典的な *ut* と共に用いられているが、比較節はこのほかに *quemadmodum* の同義語である *quomodo* によっても導かれている:

Aputactitae omnes uadent, de plebe autem qui quomodo possunt uadent (44, 3) 「修道僧たちは全員が、一般の人たちは可能なものがそこへ行く」(ほかに 24, 6; 25, 3; 43, 4)

次に理由節では *cum*, *quando*, *quod*, *quia*, *quoniam* とともに、元来は「それゆえに」を示していた *quare* が「なぜならば」の意味で同じ役割を果たしている:

ingressus est Dominus ubi erant discipuli et arguet Thomam quare incredulus fuisset (40, 2) 「主は弟子たちのいた所へお入りになり、トマスが信じなかったので非難された」

以上我々のテキストでは時間節「～の時に」を導くために接続詞 *ubi*, *ut*, *cum*, *quando*, *quod*, *qua*, *quemadmodum* が、比較節「～のように」を導くためには *ut*, *quemadmodum*, *quomodo* が、そして理由節「～なので」では *cum*, *quando*, *quod*, *quia*, *quoniam*, *quare* が混在していることになる。これら各種の接続詞のうち、ロマンス諸語においても形を変えつつなお生命力を保ち続けたものは、*ubi* (*panroman*), *quando* (*panroman*), *quomodo* (*panroman*), *quod*, *quia*, *quare* である。

以上は副詞的従属節について眺めたものであるが、主節に続く名詞的従属節についてもやはり同じように色々な表現方法が共存している。この種の従属節を導くものは、*Peregrinatio* では *quod*, *quia*, *quoniam*, *ut* および不定法句であるが、問題はこれらがどのような動詞と結びつくかである。

我々にとって中でも最も興味あるのは、いわゆる知覚・伝達動詞と結びつく場合である。テキストで該当する知覚動詞は *aestimo* 「判断する」、*audio* 「聞く」、*credo* 「信じる」、*invenio* 「見出す」、*puto* 「思う」、*scio* 「知っている」、*video* 「見る」であり、伝達動詞は *dico* 「言う」、*ostendo* 「示す」、*refero* 「述べる」、*scribo* 「書く」、*testor* 「示す」である。古典ラテン語においては、このような動詞はもっぱら不定法句によって名詞的従属節を表現していた。我々のテキストでもその例は少なくない：

eos... quos tamen non aestimabam me penitus posse uidere (26, 6) 「会うことができるとは全く思っていなかった人々を」(ほかに *aestimo* + 不定法句の例は 46, 1 ; 46, 6)

pulchriorem territorium puto me nusquam uidisse quam est terra Iessen (9, 4) 「私はゴセンの地より美しい土地をどこにも見たことがないと思う」(ほかに 2, 6 ; 2, 7 ; 3, 8 ; 16, 3 ; 49, 2)

sanctum Abraam... scio... in eo loco uenisse (20, 9) 「私は聖アブラハムがこの場所へやって来たことを知っている」(ほかに 37, 9)

uideo te... magnum laborem tibi imposuisse (19, 5) 「私はあなたが非常な努力を払ったことが判る」(ほかに 14, 3 ; 19, 11)

id est ea in ualle quem dixi subiacere monti Dei (5, 8) 「すなわち、私が神の山のふもとにあると言った谷において」(ほかに 8, 2 ; 19, 6 ; 37, 5 ; 37, 6 ; 45, 1)

quia retinebam scriptum esse baptizasse sanctum Iohannem in Enon iuxta Salim (15, 1) 「聖ヨハネがサリムに近いアイノンで洗礼を受けたと書かれていたの思い出したので」(ほかに 7, 9 ; 13, 4 ; 18, 2 ; 20, 10 ; 26, 4)

quem se illuc missurum... Deus noster Iesus testatus est per epistolam (17, 1) 「わが神イエスがそこへ送るであろうと手紙で明言した〔聖トマス〕」

しかしこれらの動詞の名詞的従属節は *Peregrinatio* では不定法句によって表わされるばかりでなく、接続詞によって導かれるものもある。次の二例は両者が同一文の中に混在しているものである：

sed quia audieram eos, eo quod extra diem paschae et extra diem hanc, non eos descendere de locis suis (20, 6) 「しかし彼らは復活祭の日とこの日以外は、自分たちの住んでいる場所から下りてこないと聞いていたので」

Ac sic ab hora sexta usque ad horam nonam, semper sic leguntur lectiones aut dicuntur ymni ut ostendatur omni populo quia quicquid dixerunt prophetae futurum de passione Domini, ostendatur tam per euangelia quam etiam per apostolorum scripturas factum esse (37, 6) 「このようにして第六時から第九時までの間ずっと聖書が朗読され、讚美歌が歌われる。それは、予言者たちが主の受難について予言したことのすべては、福音書や使徒達の書いたものによって実現されたことが明らかであることを、すべての人々に示すためなのである」

はじめの例は知覚動詞 *audio* と共に不定法句、および不完全な形ではあるが接続詞 *quod* に導かれる従属文が混在しているものであり、第二の例は非人称的受動相の形をとる *ostendo* が、同じ文の中で一度は接続詞 *quia* による従属文を、二度目は不定法句を用いているものである。

我々のテキストの中に *quod* 文の例は幾つも見出すことができる。即ち：

Et hoc per scripturas sanctas inuenitur quod ea dies sit enceniarum qua et sanctus Salomon... steterit ante altarium Dei et orauerit (48, 2) 「奉獻の祝日は聖ソロモンが神の祭壇の前に立って祈った日であるということが聖書に書いてある」

hoc nobis ipse sanctus episcopus retulit eo quod Farao, quando uidit quod filii Israhel dimiserunt eum, tunc ille... isset cum omni exercitu suo intra Ramesse et incendissent eam omnem (8, 5) 「その聖なる司教は我々に、ファラオはイスラエルの息子たちが彼のもとを離れたことを知ると全軍を率いてラメセスの町に入り、そのすべてを焼き払ったと語った」

dicent eo quod filii Israhel in honore ipsorum eas posuerint (8, 2) 「イスラエルの息子たちが彼ら〔モーセとアロン〕を記念してそれら〔二つの大きな像〕を作ったということである」

Illud etiam presbyter sanctus dixit nobis eo quod usque in hodierna die semper cata pascha... omnes in ipso fonte baptizarentur, sic redirent mature ad candelas cum clericis et monachis (15, 5) 「さらに聖なる司祭は、今日でもなお復活祭の度毎に〔洗礼を受けるべき〕すべてのものがその泉で洗礼を受け、朝早く松明を照らしながら僧や修道僧たちとともに戻ってくるのだと我々に話した」

Illud etiam retulit sanctus episcopus eo quod hii fontes ubi ereperunt ante sic fuerit campus (19, 14) 「さらに聖なる司教は、これらの泉が湧きでた場所は昔は野原だったと語った」

Illud etiam retulit nobis sanctus ipse dicens eo quod ex ea die qua Ananias cursor per ipsam portam ingressus est cum epistola Domini usque in praesentem diem, custodiatur ne quis immundus... per ipsam portam transeat (19, 17) 「さらにその聖なる人は、急使のアナニアスが主の手紙をもってその門を入ってから今日まで、けがれたものが誰一人その門を通らぬよう見張りがなされていると我々に語った」

以上に見られる *inuenio*, *video*, *dico*, *refero* の例では、多くの場合に中性指示代名詞 *illud* または *hoc* が先行している。これは元來感覚動詞の *miror quod* などにのみ用いられていた *quod* が感覚・伝達動詞にまで拡大されてゆく途中に生じた中間段階で、*Caesar* や *Livius* にもその例を見ることができるものである。また *quod* のみでなくほとんどが *eo quod* となっているのは、*quod* が理由節を導く場合に予告のために先行する副詞 *eo* が表現として固定したもので、これまた移行段階の名残りを示すものであろう。

前述のように我々のテキストでは *quod* と共に *quia* にも名詞的従属節を導く働きをしているものがある。これは *quia* が *quod* 同様、元來理由節を導くものであったところから自然の成り行きであったに違いない。そしてこの *quia* は、のちに最も力をもつことになる。以下その例を示すと：

Sed mihi credite, dominae uenerabiles, quia columna ipsa iam non paret, locus autem ipse tantum ostenditur (12, 7) 「しかし修道女の皆さま方、その〔ロトの

妻が化した塩の)柱はもう見ることができず、その場所だけが示されるのだということを信じていただきたい」

ecce rex Aggarus qui, antequam uideret Dominum, credidit ei quia esset uere filius Dei (19, 6) 「これがアガルス王〔の像〕です。彼は主を見る前に彼が本当に神の子であることを信じたのです」

Illud autem uos uolo scire, dominae uenerabiles sorores, quia de eo loco ubi stabamus... ita infra nos uidebantur esse illi montes (3, 8) 「修道女の皆さま方、我々が立っていた場所からはその山々が我々のずっと下に見えていたということを、私はあなた方に知っていただきたいのです」

Naor autem uel Bathuhelem non legi quando in isto loco transierint, nisi quod hoc solum scio quia postmodum puer Abraae, ut peteret Rebeccam filiam Bathuhelis, filii Nahor... in Charra uenerit (20, 9) 「私はナホルとベトエルがいつこを通ったのかについて読んだことはありませんが、ただ、少しあとにアブラハムのしもべがナホルの息子ベトエルの娘リベカを求めにカラヘやって来たことだけは知っています」

Vt autem sciret, affectio uestra, quae operatio singulis diebus cotidie in locis sanctis habeatur, certas uos facere debui sciens quia libenter haberetis haec cognoscere (24, 1) 「修道女の皆さま方、聖地では毎日どのようなお勤めが行われているのかをあなた方が知るために、私はあなた方にそれを伝えなければならないと思いましたが。あなた方がお勤めの詳細を知ればうれいだろうと思ったからです」

Tunc dictum est nobis quia in isdem diebus qua sanctus Moyses uel filii Israel contra illas ciuitates pugnauerant castra ibi fixa habuissent (12, 9) 「聖モーセとイスラエルの息子たちがその町々を攻めていた時、彼らはそこに陣営を置いていたのだと人々は我々に話した」

et dicentibus ei aliis apostolis quia Dominum uidissent, ille dixit : Non credo nisi uidero (39, 5) 「ほかの弟子たちが自分たちは主にお会いしたと言うと、彼は言った : 私は見たのでなければ信じない」

以上が Peregrinatio に見られる credo, scio, および dico の例であり、quod の場合と同じく illud, hoc の先行している場合がある。

quod, quia に加えて、同じように理由節を導く接続詞であった quoniam も名詞節に用いられている。次がその例である :

Nam mihi credat uolo, affectio uestra, quoniam nullus christianorum est qui non se tendat illuc gratia orationis (17, 2) 「修道女の皆さま方、祈りのためにその地へおもむかないキリスト教徒は一人もいないということを信じて下さいますように」

Deus autem scit, dominae sorores, quoniam maiores uoces sunt fidelium qui ad audiendum intrant in cathecisen ad ea quae dicuntur uel exponuntur per episcopum (46, 4) 「修道女の皆さま方、司教が話し説明することを聞くために教えの場に来る信者たちのあげる声が、いつもよりも大きいことを神は知っているのです」

Nam episcopus loci ipsius, id est de Segor, dixit nobis quoniam iam aliquot anni essent a quo non pareret columna illa (12, 7) 「その地の、すなわちセゴルの司教は、もう数年前からその〔塩の〕柱は見えなくなっていると我々に言った」

Nam uere scriptura hoc testatur quoniam ad accipiendam sanctam Rebeccam huc uenerit puer sancti Abraae, et denuo sanctus Iacob hic uenerit, quando accepit filias Laban Syri (20, 10) 「聖リベカを迎えるために聖アブラハムのしもべがここへやって来たこと、そしてまた聖ヤコブもシリア人ラバンの娘たちを迎えた時にここへ来たことを聖書は確かに示しています」

以上に見るように *credo, scio, dico, testor* が *quoniam* と共に用いられており、中性指示代名詞を伴うものもある。

今までに調べたことから我々のテキストにおいて知覚動詞と伝達動詞が不定法句をとるのか、それとも接続詞 *quod, quia, quoniam* に導かれる従属節を伴うのかは、全体の数の上では

	不定法句		従属節	
知覚動詞	15	} 29	10	} 19
伝達動詞	14		9	

となって、不定法句が約一倍半の頻度で用いられていることになる。また不定法句の例にも従属節の例にも共通して現われている動詞 *scio, video, dico, testor* について見ると、

	不定法句		従属節	
<i>scio</i>	2		4	
<i>video</i>	3	} 12	1	} 12
<i>dico</i>	6		6	
<i>testor</i>	1		1	

となって頻度は相半ばしている。不定法句の使用が普通であった古典時代の慣用から離れてよりロマン語的な従属節の使用へむかう傾向をここに見てとることができよう。元来不定法句には曖昧なものがつきまどっている。動詞のテンスの問題もそうだが、何よりも従属節の主語が明示されない場合があるという弱点は否定することができない。*dico te Romanos vincere posse* は「汝はローマ人を打ち敗ることができる」なのか、「ローマ人は汝を打ち負かすことができる」なのか。従属節の主語を主格によって明示し、動詞を人称に応じて変化させるために *quod* 以下の接続詞を用いるのは、より分析的であると同時に、従属節を一層際立たせてこれにより多くの表現性を与えることになる。

従属節と共に用いられている三種の接続詞の内訳は、

(<i>eo</i>) <i>quod</i>	7
<i>quia</i>	8
<i>quoniam</i>	4

となっていて、数の上で *quod* と *quia* は大体伯中し、*quoniam* はやや少ない。なお従属節内部の法は *quod* (7 例中、接続法 6 例) と *quia* (8 例中、接続法 5 例) では、接続法が優勢、*quoniam* (接続法 2 例、直説法 2 例) では接続法、直説法は同数である。

上記の三接続詞のうち、ロマンス諸語に残るのは *quod* と *quia* である。*quod* はルーマニア語 *că*、古期イタリア語 *eo* などに痕跡を残すにすぎないが、*quia* はずっと広範囲に用いられて、子音に先行する形 **qua* は古期イタリア語、古期スペイン語、サルディニア

語で *ca* となり、また母音に先行する形* *qui* はフランス語 *que*、イタリア語 *che*、カタロニア語、スペイン語、ポルトガル語 *que* を生んだと考えられている。^(注2) この結果から推定するとある時期には *quia* が他を圧して優勢であったと考えられるが、我々のテキストでは前述のとおり、特にどれがぬきんでているということはない。

なお最後に接続詞 *ut* について一言つけ加えるならば、この接続詞による従属文は次の例の一方によっても判るように、我々のテキストでは古典ラテン語の不定法句の代りに用いられている場合があり、ここにも接続詞の使用法の拡大のさまを見ることができるのである：

certum est eum ab angelis fuisse sepultum (12, 2) 「彼が天使たちによって埋葬されたのは確かである」

fuit mihi ... oportunum satis ut ... inde ad Mesopotamiam irem (17, 3) 「そこからメソポタミアへ行くのは、私にとって大変都合がよかった」

注1 V. Väänänen : Introduction, § 20.

注2 同書, § 374, 375

Bibliographie

- H. Pétré : *Ethérie, Journal de voyage*, Paris, 1948
E. Bourciez : *Eléments de linguistique romane*, Paris, 1967
A. Ernout : *Aspects du vocabulaire latin*, Paris, 1954
A. Ernout, F. Thomas : *Syntaxe latine*, Paris, 1964
R. A. Haadsma, J. Nuchelmans : *Précis de latin vulgaire*, Groningen, 1966
国原吉之助「中世ラテン語入門」, 南江堂, 昭和50年
E. Löfstedt : *Philologischer Kommentar zur Peregrinatio Aetheriae*, Uppsala, 1936
松平千秋, 国原吉之助「新ラテン文法」, 南江堂, 昭和50年
V. Väänänen : *Introduction au latin vulgaire*, Paris, 1967